



ぼんぼん時計

JSPS Bonn Office

独立行政法人 日本学術振興会 ボン研究連絡センター
四半期活動報告
(2010年1月～3月)

< 目 次 >

1. ドイツ連邦レベル等での学術・高等教育動向

- 1-1 ドイツ研究振興協会 2010年主要課題は「大学の強化」
- 1-2 ジュニア・プロフェッサーのキャリアパス
- 1-3 第1回国際的大学賞の授与
- 1-4 学術用語としてのドイツ語
- 1-5 エクセレンス・イニシアティブ第2ラウンドの開始
- 1-6 教育研究予算は増額

2. ボン研究連絡センターの活動

- 2-1 第6回日独コロキウム「World Heritage for Tomorrow」開催
- 2-2 連邦教育研究省主催国際会議「Geist kennt keine Grenzen」出席
- 2-3 ポツダム地球科学研究所主催「Japan-Germany Workshop on Integrated Environmental Research」出席
- 2-4 その他来訪&訪問、会議出席等

3. 今後の予定

4. その他お知らせ

5. センター長雑感



1. ドイツ連邦レベル等での学術・高等教育動向

1-1 ドイツ研究振興協会 2010年主要課題は「大学の強化」

DFG HP Press 2009/1/19 (http://www.dfg.de/service/presse/pressemitteilungen/2010/pressemitteilung_nr_03/index.html) 参照
ドイツ研究振興協会 (DFG) 会長マティアス・クライナー氏は、新年における同研究協会の主要な課題を「大学を強化する」というモットーで表現した。同氏は、先端研究と教育は密接不可分な関係であると強調する。また、過去においてすでに DFG が大学の強化および個々のプロジェクトや連携における基礎研究の強化を担ってきたことを引き合いに出した。以下はその例である。

- ・柔軟化と細分化による自由裁量の創設
- ・若手研究者（とりわけ初の申請を行う者）へのスタート補助
- ・ヨーロッパ化と国際化の強化
- ・知識の伝達
- ・研究領域における機会均等の基準
- ・ラインハルト・コゼレックのリスクプロジェクト
- ・電子情報イニシアティブとオープンアクセス
- ・博士号取得希望者の地位改善
- ・ポジション支援における改善
- ・特別推進領域 (SFB) トランスレギオプログラムの継続

さらに、クライナー会長は、エクセレンス・イニシアティブの全学術界に与えた影響を強調した。同イニシアティブ第1回の決定過程を通して、4000名を超える研究者および約330の教授職を有するトップ(先端／指導的／上位)大学が各地に誕生したことになるという。クライナー氏は、これらの卓抜した研究者がただ研究のためだけではなく、教育においても強力に寄与するものであることを強調した。また、エクセレンス・イニシアティブは、大学の特色形成においてのみ強化しただけではなく、大学を学外機関との連携における強力なパートナーへと変化させた。

DFG 助成事業の欧洲化、国際化の継続もまた、大学の強化に一役買うことになるという。昨年、DFG は、G8 諸国の研究および研究助成機関に対して、多国間研究助成に関するイニシアティブの提案を行った。クライナー氏は、「1月末にはすでに最初の公募が始まり、ドイツ、フランス、日本、カナダ、ロシア、イギリス、米国からの反響に非常に期待を寄せている」と述べた。

(ボンセンター)

1-2 ジュニア・プロフェッサーのキャリアパス

dpa-Dossier Bildung Forschung Nr. 06/ p. 25-26 2010年2月8日参照

ベルリン社会科学研究所調査報告書 (Silke Gölker 著) 参照

http://bibliothek.wzb.eu/wzbrief-arbeit/WZBriefArbeit052010_guelker.pdf



ベルリン社会科学研究所の調査によると、若手研究者の多くは、教授資格試験に通らなければ、教授に任命されることはないと考えており、また、独立研究グループリーダー※2であっても、学者としてのキャリアにはほとんど影響しないと考えていることが判明した。教授資格の取得は、今でも第一に、各々の学科の事情によって決まっており、ジュニア・プロフェッサー※1から教授への昇進はほとんどないのが実情という。

2002年当時のエーデルガート・ブルマーン連邦教育研究大臣が導入したジュニア・プロフェッサーにより、大学教授になるための新しい道が開かれ、これまで800人のジュニア・プロフェッサーが採用された。そのうち33.5%は女性である。

調査アンケートに回答した女性ジュニア・プロフェッサーの多くは、俸給の低さにもかかわらず、自分たちの境遇を概ね肯定的に捉えている。基本給は旧西ドイツ州の場合、約3400ユーロである。それに対して、旧東ドイツでは3150ユーロに満たず、その額はギムナジウム、州によつては実科学校の教師の俸給に相当すること。研究ポジション獲得競争が激しいなか、教授資格試験を目前にした研究者にとっては、ジュニア・プロフェッサーにつくことは合理的かもしれないが、この職は若手研究者にとって必ずしも新しいキャリアパスという意味にはならず、大学が人件費を節約する手段ともとらえられている。

しかし、近年開始された大学での先端研究支援事業であるエクセレンス・イニシアティブによつて、上記のポジションの重要性は今後高まっていくと見られている。エクセレンス・イニシアティブは研究者の任用等に新しい可能性をもたらしており、例えば、研究者に終身在職権というオプション提供や、俸給の上限拡大等ができるようになった。すでに、若手研究者による研究成果は所属機関の評判を上げ、結果として、研究者自身の待遇改善を結果としてもたらしている。

※1 ジュニア・プロフェッサー (Juniorprofessur)

研究者の自立が遅れるという問題が指摘されていた、従来の大学教授任用システムである「Habilitation (大学教授資格)」を改善するため、2002年に導入された。若手研究者が早期に独立して教育・研究を行えるポストとして設立。

※2 独立研究グループリーダー (Nachwuchsgruppenleitung)

マックスプランク研究協会、フォルクスワーゲン財団、ヘルムホルツ研究協会およびドイツ研究協会がそれぞれ独自に実施する、独立した研究グループリーダーとして活動する資金等を提供するプログラムによって採用された若手研究者。DFGの「Emmy Noether Programme」では、2~4年(医学の場合は6年まで)のポスドク経験および充分な国際的研究の経験を持つ若手研究者に対し、独立した研究グループリーダーとして活動するための資金を5年間提供。

(ボンセンター)



1-3 第1回国際的大学賞の授与

DAAD HP Press 2010/1/27 参照 <http://www.daad.de/portrait/presse/pressemitteilungen/2010/12630.de.html>

DAAD HP Press 2010/2/24 参照 <http://www.daad.de/portrait/presse/pressemitteilungen/2010/13053.de.html>

ドイツ学術振興寄付財団連盟およびドイツ学術交流会 (DAAD) は、今年が初めてとなる「国際的大学」賞の授与を行った。5万ユーロの賞金が与えられる同賞は、将来的には毎年授与されるところで、今年は「ドイツ人学生の海外流動性に関する成功戦略」をテーマとして行われた。

26大学の申請から5つが最終審査に選考され、2月23日にロイトリンゲン大学が優勝校となつた。ベルリンで開催された「ボローニャが流動性を生み出す—海外での学業についての成功モデル及び構想」会議において、ファイナリストの公開プレゼンテーションと表彰式が実施された。

DAADの副会長であり、同審査委員会の委員長を務めるMax Huber氏によると、「同大学の戦略は、大学での生活にかかるあらゆる領域を包括しつつ実践に則した国際性のモデルである。大学の運営レベルが、実際の指導と具体的な規則とを組み込んだ明確な戦略的方針を有していることが模範的である。」と受賞の要因を述べる。

(ボンセンター)

1-4 学術用語としてのドイツ語

DAAD HP Press 2010/2/25 参照 <http://www.daad.de/portrait/presse/pressemitteilungen/2010/13058.de.html>

ドイツ学術交流会 (DAAD) は、学術用語としてのドイツ語奨励に関する覚書を提示した。その中で同会は、英語による寡占化が進む国際学術界において、ドイツ語はその伝統豊かな地位を保ち続ける必要があるということを主張している。加えて、ドイツ外務省のイニシアティブ「ドイツ語—思想の言語」の開始にあたり、DAAD事業によって、どのような言語政策指針を目指すべきかが報告された。

DAADの主要課題には、外国語としてのドイツ語の奨励並びにドイツの大学の国際化がある。DAADは、そのポジション・ペーパーの中で、英語の地位を「リングア・フランカ（異なる言語を使う人達の間で意思伝達手段として使われる言語）」として認めるとともに、学術界における多言語性を支持する観点から、ドイツ語もまた学術および文化の言語として育成するとしている。一方では研究における世界的コミュニケーション能力が保証されなければならないとともに、他方で、ドイツ人研究者に対して、自身の母語及びしかるべき言語上の微妙な差異の中で自身の知識を獲得し伝達するという可能性を常に保ち続ける必要があるとし、ドイツ語の習得による利点—学術、経済、文化に関する重要な拠点の一つへの入口といったように一がいっそう高められるべきと、覚書には示されている。

(ボンセンター)



1-5 エクセレンス・イニシアティブ第2ラウンドの開始

dpa-Dossier Bildung Forschung Nr. 11/ p. 20-21 2010年3月15日参照

DFG HP Press 2010/3/12参照

http://www.dfg.de/service/presse/pressemitteilungen/2010/pressemitteilung_nr_12/index.html

ドイツ研究振興協会 (DFG) とドイツ学術審議会 (WR) は、第2回目となるエクセレンス・イニシアティブ公募について発表した。段階的な審査の後、2012年の6月に最終審査の結果が発表され、11月に助成が開始される。総額27億ユーロ (連邦政府75%、州政府25%を負担) が5年間かけて助成されることになり、この金額は第1回の助成額より30%増である。

予定助成額は、若手科学者養成のための大学院設立構想 (グラデュエート・コラージュ) に対して年間100万～250万ユーロ、先端研究支援を目的とした研究拠点設立構想 (エクセレンス・クラスター) に対しては年間300万～800万ユーロとなっている。大学の将来構想 (エリート大学) についての助成総額は予め設定されていないが、年間でおよそ1億4千200万ユーロ、最大で5件の構想を新たに採択する方針。これまで、エリート大学として9大学が採択されている。

まず、計画草案 (予備申請) の受付が2010年9月1日まで行われ、その後、各段階での審査後、2012年6月に最終結果が発表される。予備申請はこれまで採択されていない新しいプロジェクトが対象だが、予備申請結果発表後の本申請からは、エクセレンス・イニシアティブ採択大学からの延長申請が合わせて受けられる。

大学における先端研究強化が同事業の主要な目的であるが、今回からは教育の質も考慮されることになる。アネット・シャバーン連邦教育研究大臣は「研究志向の革新的な教育構想も、未来構想の審査において考慮される。」と述べている。それ以外にも、未来構想における教育に対する一般的な効果も審査の対象に加えられる。

(ボンセンター)

1-6 教育研究予算は増額

dpa-Dossier Bildung Forschung Nr. 12/ p. 14 2010年3月22日参照

BMBF HP Press 2010/1/19参照 (<http://www.bmbf.de/press/2765.php>)

BMBF HP Press 2010/3/18参照 (<http://www.bmbf.de/press/2818.php>)

3月18日、連邦教育研究省 (BMBF) は2010年度予算を発表した。総額は前年度比約6億6千万ユーロ増 (約6.5%増) の108億6千ユーロとなっている。キリスト教民主/社会同盟と自由民主党による連立協定では、現政権任期中に教育研究へ合計120億ユーロの追加投資を定めており、着実に実行しつつある。

プレス発表 (1月および3月) による項目別主要予算額は以下のとおり。



- ・大学協定：5億900万ユーロ
- ・奨学金：2億5000万ユーロ
- ・大型研究機関支援：40億ユーロ
- ・職業教育の近代化および強化：1億9300万ユーロ
- ・生涯学習の強化：2億100万ユーロ
- ・持続開発研究：1億3700万ユーロ
- ・環境技術と持続性研究：1億4400万ユーロ
- ・新技術プロジェクト支援：7億900万ユーロ
- ・生命科学分野：5億ユーロ

その他、優れた研究者にドイツでの長期研究環境を提供するフンボルト・プロフェッサーシップには前年度比3900万ユーロ増、途上国・中進国・EU内の協力を中心とした国際化戦略に1300万ユーロ増が盛り込まれた。

なお、2010年度予算における財政赤字の額は過去最高となる802億ユーロにのぼる。野党は、BMBFの資金は間違ったところに支出されると批判しており、また、与党側であるショイブレ財務大臣も「高齢化社会において、競争力を延ばすと同時に赤字を縮小させるのは困難な課題であるが、借金増加にはブレーキをかけなければならない。来年度はまだ大丈夫だろうが2012年度以降は非常に厳しい状況になるだろう」と財政改革の必要性を述べた。

(ボンセンター)

2. ボン研究連絡センターの活動

2-1 第6回日独コロキウム「World Heritage for Tomorrow: What, How and For Whom」開催

月日：2010年2月17日～20日

場所：ブランデンブルク州立工科大学 (BTU) (コットブス市)

ボン研究連絡センターは毎年下半期に日独コロキウムを開催している。コロキウムは日独双方の第一線若手研究者による研究発表と充実した討論を行う小研究会であり、相互の理解を深め、研究協力のきっかけを提供することを目的としている。過去5回は自然科学分野をテーマとしていたが、本年は初めて人文社会分野を含めた学際的テーマとして「世界遺産」を取り上げた。

会場となったBTUは、ポーランドとの国境に近い人口約10万人の都市であるコットブス市に所在する。1991年創立という若い大学であり、学生数も約5600人と小規模だが、留学生がそのうち900人を占め、その割合も16%高い(ドイツ最古の大学であるハイデルベルク大学は18.7%)。



また、ドイツで唯一、世界遺産専攻を設置する大学として名も知られ、日本側コーディネータである日高健一郎教授所属の筑波大学世界遺産専攻とは大学間交流協定を提携している。

会議には、建築史、保存、修復学の他、社会科学、デザイン、環境工学など、幅広い分野から日・独（英、アイルランド、ポーランド含）合わせて25名の専門家と、BTU世界遺産専攻の学生10名程度がオブザーバーとして参加した。別途、米国から招待された国際記念物遺跡会議（ICOMOS）会長のほか、ICOMOS英国およびポーランドの議長も講演者として参加し、日独を核とした国際的集会となった。

コロキウム前夜のレセプションでは、BTUのWalther Ch. Zimmerli学長、Martina Münchブランデンブルク州科学文化大臣、三好真理在独日本大使館公使および本会小野理事長（河村裕美研究協力第一課長代読）から開催の挨拶をいただいた。また、コロキウム初日のセッション開始前にJSPS事業の紹介を河村課長が行った。



挨拶者に、JSPSとBTUの文字が入ったマルチバンがプレゼント



独側コーディネータ BTU Prof. Leo Schmidt と
日本側コーディネータ筑波大学日高健一郎教授



河村課長による JSPS プレゼンテーション

セッション1日目は「What」に焦点を当て、世界遺産の決定要因やその将来的価値、2日目は「How」に焦点を当て、遺産の保護活動や方法・手段等が事例紹介やケーススタディを基に議論された。そして、全体を通して「For Whom」が哲学、倫理学的視点も含めて包括的に議論された。遺産保護分野から、塗装構造の科学的分析、環境保全のための人的土壤管理から遺産の経済的活用など、様々な研究アプローチの紹介がなされ、政治的要素を強く受ける世界遺産の価値や登録に、科学者ができることは何かという議論が活発に行われていた。



最終日となる3日目には、コットブスからバスで約1時間半のドレスデンに赴き視察を行った。最近まで世界遺産に登録されていたドレスデンのエルベ峡谷は、渋滞緩和を目的とした橋の建設により、景観を損ねるとして2009年6月に登録抹消となっている。架橋建設現場を訪れた参加者は、都市の利便性や開発と世界遺産保全の両立をめぐる問題について再認識し、互いに意見を交わし



ていた。本コロキウムが契機となり、世界遺産を軸とした日独研究協力の進展が期待される。

(宮元)

2-2 連邦教育研究省主催国際会議「*Geist kennt keine Grenzen*」出席

月日：2010年2月25日、26日

場所：Collegium Leoninum（ボン市）

本会議（和訳：精神は境界を越えて）は「人文科学年2007」に際してスタートした連邦教育研究省（BMBF）の振興プログラム「人文科学に自由な発展機会を」の一環として開かれるもので、ドイツの人文科学の世界的な「立ち位置」を確認し、将来戦略について議論することを目的としている。パネリストはJSPS村田直樹理事のほか、イギリス、イタリアからも選ばれていた。

－会議1日目－

BMBF人文社会科学分野担当部長から、「最近のドイツの精神科学の国際展開には伝統的な強さが辛うじて保たれているように見えるが、この会議では、さらなる発展を願って多面的な討論がなされるよう期待する」旨の挨拶の後、ハーバード大学のHomi Bhabha教授による「グローバリズムの中での個別性、マイノリティーとマジョリティー、ナショナリズムとインターナショナリズムの対立、それを超える人文・社会学の重要性」をテーマとした熱のこもった基調講演があった。

次いで会議の基礎資料となる統計調査を担当したMinks教授より調査結果の報告講演があった。氏は「ドイツは、その優れた博物館、アーカイブ、図書館などのために、引き続き人文学分野の優れた研究場所であり、高く評価されているが、言語障壁、国内職場の減少、研究資金の減少などが足かせになっている」とのまとめをした。

セッション1《アイデアのトランスファー》では、「人文学分野の研究者は研究上のコンタクトやネットワークがあれば、必ずしも国際共同研究は必要としない。」「研究促進事業は資金が付くが管理運用上の労力負担が少くない。」「十分な学術語学力がないと人文学分野では眞の交流は困難で、安易な留学は問題。考古学などでは英語よりも現地語の重要性が高い。」「教育研究現場に優れた外国研究者を加える努力が有効。」などの意見が聞かれた。

セッション2《研究の質》では、樋口明治学院大学教授（日本DAAD友の会会長）が音楽学分野について報告を行い、「国際誌が無いため人文学分野では発表論文の質評価の困難であり、かつ、コミュニティーが小さくピア・レビューが機能しにくい事情があるため、社会へのインパクトを評価の指標とすべきである。また、ドイツの人文学分野の出版物は一般に難解すぎる。」などの意見が出された。



会議終了後、オルガンとトランペットによる音楽演奏があり、レセプションとなった。BMBF 関係者以外にフンボルト財団、DAAD、ドイツ大学関係者の計100人近い参加があり、これらの人々と意見交換をする貴重な機会となった。

－会議2日目－

セッション3《キャリアパス》では、「人文科学分野修了者のキャリアパスについて、収入やポジションを得る機会の見通しが立たないことから多くの者が研究職には就かないこと、また、若手研究者はアメリカや英国に拠点を移す状況」が報告された。

当該セッションにパネリストとして出席した本会
村田直樹理事からは、日本の状況として、出生率低下による学生人口減、大学院重点化による助手ポストの教授ポストへの振替、教養部の廃止等により若手のアカデミック・ポストが減ってきており、人文科学分野の研究者のキャリア展望は明るくないこと、他方でJSPSの特別研究員への申請状況を見ると過去5年間に全分野平均で20%減少しているが、人文科学分野では10%の減少に留まっていること、また、人文科学分野の博士課程学生やポスドクはアカデミック・ポストを志望する傾向が強く、博士課程修了直後に常勤研究職に就く者の比率は他の分野に比べて低いが、5年後には他の分野と同程度の比率で常勤研究職に就いていること、等が紹介された。



セッションで説明する村田理事

また、日本では、日本のアカデミック・コミュニティとのつながりが切れて国内のアカデミック・ポストに就職する機会を逃してしまうことを恐れて、若手研究者が海外で教育研究経験を積むことに消極的であるとの指摘があるのに対して、ドイツでは逆に外国のアカデミック・ポストをめざして優秀な人材が流出することが問題になっており、国内における大学教員への就職機会の減少という事態への対処方法が異なっているように思われる旨発言した。これに対して、国内のアカデミック・コミュニティとの断絶はドイツでも問題であり、mid-careerの確保が必要との認識が示された。

セッション4《学術言語と出版の実際》では、研究や論文発表等における英語の必要性とドイツ語のあり方が討議され、「現状の趨勢では英語で発信しなければ、良い研究も埋もれてしまう」という意見の一方「地域研究のような狭い分野であれば、英語で発信する必要性は必ずしもない」「英語だけでは、正確な意図や微妙な表現はできない」「ドイツ語を人文学における学術用語として認識・利用できるよう、海外に広める施策が必要」との意見も聞かれた。



セッションの合間に、村田理事はドイチェ・ヴェレ（海外向けドイツ国際放送局）から人文科学分野における若手研究者のキャリアパスについてインタビューを受け、日本の人文科学分野の研究振興におけるJSPSの役割や米国の博士課程における研究者養成訓練の卓越性等についてコメントされた。



ドイチェ・ヴェレによるインタビュー

(小平、宮元)

2-3 「Japan-Germany Workshop on Integrated Environmental Research」出席

月日：2010年3月14日、15日

場所：ポツダム気候変動・地球科学研究所（IASS）（ポツダム市）

第20回日独合同科学技術委員会（於ボン）で開催合意のあった、Institute for Advanced Sustainability Studies eV.（IASS：ポツダム気候変動・地球科学研究所）のための日独国際協力構想検討会の第一回会議が開催され、小平所長が出席した。当該研究所は、連邦政府主導により、ライプニッツ協会傘下の研究所としてポツダムに設立されたものである。

日本側からは、在独日本大使館およびJSTの他、低炭素社会センター関連で東京大学山田興一教授、名古屋大学から世界トップレベル研究拠点事業（WPI）関連で山本進一教授、財団法人地球環境戦略研究機関（IGES）から森嶋昭夫元理事長、日本側受け皿の中心と期待されている総合地球環境学研究所（RIHN）から立本鳴文所長、佐藤洋一郎、渡邊紹裕、阿部健一教授ほか4名が出席した。

ドイツ側はライプニッツ協会長 Prof. Rietzel、IASS所長 Prof. Toepfer、ポツダム大学長 Prof. Kunst、ドイツ技術科学アカデミー会長 Prof. Kagermann、持続的発展諮問会議事務局長 Dr. Bachmann、IASS気候変動評価研究担当部門長 Prof. Weisz 氏等が出席した。ワークショップ・レセプションには、連邦教育研究省の Thielen 事務次官、連邦議会環境委員会議長の Dr. Jung、在独日本大使館の神余大使も出席された。

ワークショップでは、小平所長がJSPSの環境研究支援状況を紹介したほか、各機関から環境・持続社会関連で現在行っている事業・活動の紹介が行われた。日本側が低炭素社会センターの政策研究で僅かに経済問題に触れたものの、全般的には地球環境学研究に重きが置かれていたのに対し、ドイツ側は社会機構・産業機構・経済機構を含めての全般的な持続的発展に关心の中心があり、IASS設置の政策背景もそこにあることが伺えた。



(小平、宮元)

2-4 来訪&訪問、会議出席等

【1月】

01月05日 (火) ゼンケンベルク自然博物館 Micheal Türkay副館長および酒井勝司客員教授がシンポジウム協力御礼および日独アーカイブの現状にかかる意見交換のため来訪

01月12日 (火) 宮元副所長が在独日本大使館新年賀詞交歓会出席 (於ベルリン)

01月14日 (木) 小平所長が田中靖郎前所長のNRW州功労賞授賞式出席 (於デュッセルドルフ)

01月18日 (月) 小平所長および宮元副所長が在独日本大使館西井一等書記官および福井一等書記官と日独交流150周年記念シンポジウムの打合せ (於ベルリン)

01月18日 (月) 小平所長および宮元副所長がDFG新年賀詞交歓会出席 (於ベルリン)

01月20日 (水) 東京工業大学 遠藤悟教授、高橋秀美特任教授および細野光章特任助教授がドイツの大学産学連携状況調査のため来訪

01月21日 (木) 小平所長がベルリン日独センター主催シンポジウム出席ならびに在独日本大使館神余大使および理化学研究所野依良治理事長との食事会に参加

01月22日 (金) 総合研究大学院大学財務課 貝塚敏之経理係長、同葉山共通事務室笹川雄介氏、横浜国立大学財務課橋本英子氏がドイツの大学事情調査のため来訪

01月25日 (月) DAAD Ursula Toyka-Foung 日韓オセアニア担当課長およびKatrin Guenter課員がフェローシッププログラム情報交換のため来訪

01月30日 (土) 小平所長、宮元副所長およびAlbers職員がJSPS仏独同窓会及びボン・ストラスブルセンター合同フォーラム第4回準備会合に出席 (於ストラスブル)

【2月】

02月04日 (木) 小平所長およびSchulze職員がNRW州イノベーション・学術研究・科学技術省主催 筑波大学ボン事務所設置説明会参加 (於デュッセルドルフ)

02月05日 (金) 筑波大学法学研究科荒井教授が同大ボン事務所運営にかかる情報交換のため来訪

02月06日 (土) 小平所長がJSPS-DFGラウンドテーブル出席のため一時帰国 (～14日)

02月16日 (火) 文部科学省生涯学習政策局高谷亜由子氏および在独日本大使館西井一等書記官がドイツの大学教育制度状況調査のため来訪

02月17日 (水) 本部研究協力第一課河村裕美課長、同人物交流課佐々木貴大国際協力員、小平所長および宮元副所長が在独日本大使館ならびにDFGベルリン事務所にて日独交流150周年記念シンポジウムの打合せ (於ベルリン)

02月17日 (水) 第6回日独コロキウム開催 (於コットブス) (～20日)



02月24日 (水) 本会村田直樹理事が来訪し、小平所長およびDAAD国際マーケティング室長（前東京事務所長）Irene Jansen 氏と日独学術事情の意見交換

02月25日 (木) DFG東アジア担当課主催昼食会に村田理事のほかボンセンタースタッフが出席

02月25日 (木) 村田理事、小平所長および宮元副所長が連邦教育研究省主催国際会議「*Geist kennt keine Grenzen*（精神は境界を越えて）」出席（～26日）
なお、村田理事はパネリストとして参加

02月26日 (金) 村田理事、小平所長および宮元副所長がフンボルト財団を訪問しGisela Janetzke副事務局長等とフェローシップ事業等について意見交換

02月28日 (日) 小平所長が調査研究のため一時帰国（～3月6日）

【3月】

03月02日 (火) ベルリン自由大学 Prof. Dr. Jörn Manz 氏がプログラム情報収集のため来訪

03月09日 (火) 法政大学法科大学院 大中有信教授（ケルン大学客員教授）が日独コロキウム打合せのため来訪

03月10日 (水) フンボルト財団社会科学担当プログラムディレクターDr. Damian Grasmück 氏がフェローシッププログラム意見交換のため来訪

03月13日 (木) 小平所長がIASS主催ワークショップ参加（於ポツダム）（～15日）

03月17日 (水) 筑波大学橋田国際部長、大友助教およびMartin Pohl准教授が同大ボン事務所開所式打合せのため来訪

03月19日 (金) ベルリン日独センター 清水陽一副事務総長がシンポジウム実施にかかる意見交換のため来訪

03月19日 (金) Albers職員がJSPSドイツ同窓会役員会出席（於グロースゲラウ）（～20日）

03月24日 (水) 在独日本大使館 西井書記官がシンポジウム実施情報交換のため来訪

03月29日 (月) 濱田千穂国際協力員および横山鮎子国際協力員が帰任

3. 今後の予定

2010年

04月01日 (木) 斎藤秀人国際協力員および佐々木貴大国際協力員が着任

04月15日 (水) 2010年度JSPS再招へいプログラム選考会実施（於ボン）

04月21日 (水) 小平所長がセンター長会議出席のため一時帰国（～27日）

05月07日 (金) JSPSサマープログラムプレオリエンテーション開催（於ボン）



05月17日(月) 小平所長、宮元副所長が日独学長会議に出席(於ベルリン) (～18日)

05月19日(水) 宮元副所長、Schulze職員、齋藤国際協力員、佐々木国際協力員がボン大学主催留学フェア参加(於ボン)

05月19日(水) 宮元副所長、齋藤国際協力員、佐々木国際協力員が筑波大学欧州事務所開所レセプション出席(於ボン)

05月19日(水) 小平所長が名古屋大学ヨーロッパセンター開所式出席(於フライブルク)

05月20日(木) 小平所長がJSPS欧州同窓会役員会に出席(於ストラスブル)

05月21日(金) 第1回仏独JSPS同窓会及びボン・ストラスブルセンター合同フォーラム開催(於ストラスブル) (～22日)

05月28日(金) 小平所長が在独日本大使館主催 在独日本人研究者ネットワーク会議参加(於ベルリン)

06月06日(日) 次期副所長中川正志氏が業務引継のため来訪(～11日)

06月10日(水) 小平所長がフンボルト財団海外派遣フェロー選考会出席(於ボン)

06月13日(日) 本部河村研究協力第一課長、大場専門職員がGPCミーティング出席のため来訪(～16日)

06月22日(火) 宮元副所長がフンボルト財団年次総会出席(於ベルリン)

07月08日(木) DAAD主催 ドイツ大学国際担当者情報交換会参加(於ボン)

07月14日(水) 宮元副所長が帰任

08月01日(日) 中川新副所長が着任

09月06日(月) 大阪大学-アーヘン工科大学日独共同大学院プログラムキックオフシンポジウム出席(於アーヘン)

09月08日(水) JSPS Abend開催(於ボン)

09月13日(月) 小平所長、Albers職員が日独交流150周年記念JSPSドイツ同窓会共催シンポジウム「Mobility」出席(於東京) (～15日)

11月05日(金) 日本の大学及び渡日プログラム紹介イベント開催(於フライブルク)

2011年

02月17日(木) 第7回日独コロキウム開催(於ミュンスター) (～18日)

05月20日(金) 日独交流150周年記念 日独シンポジウム開催(於ベルリン) (～21日)

4. その他お知らせ

4-1 ドイツ学術交流会(DAAD)事務総長の交代

DAADの発表によれば、2010年10月1日より現DAAD事務総長Christian Bode氏に代わり、ベルリン自由大学国際センター長Frau Dr. Dorothea Rueland氏が同職に就任することです。



(DAAD HP Press) <http://www.daad.de/portrait/presse/pressemitteilungen/2010/13251.de.html>

4-2 フンボルト財団 (AvH) 事務局長の交代

AvHの発表によれば、2010年7月1日よりベルリン自由大学国際センター長 Frau Dr. Dorothea Rueland 氏が事務局長に就任することです。

(AvH HP Press) <http://www.humboldt-foundation.de/web/pressemitteilung-2010-06.html>

4-3 国際協力員の交代

2009年4月から1年間当センターで海外実地研修を行っていた濱田千穂国際協力員（東京工業大学）と横山鮎子国際協力員（広島大学）が任期を終えて帰国いたしました。濱田協力員は東京工業大学国際部国際連携課総務グループ、横山協力員は広島大学国際センター国際交流グループに配属とのことです。当センターでの業務と海外生活の経験を生かし、それぞれの機関で活躍されることを期待しております。

5. センター長雑感

とりわけ長く寒かった今年の冬も終わって、春めいてきた。サマータイム始まる。年度の代わり目、二人の国際協力員も交代だ。ポツダムに独連邦政府肝いりの Institute for Advanced Sustainability Study なる組織が立ち上げられつつあり、日独ワークショップがあった。日本側が人間社会を自然の中で捉え、独側が人間社会を軸に自然を捉えていたのが印象的だった。コットブスで開いた日独コロキュウム「世界遺産の将来」でも、両者の視点の据え方の違いが顕著だった。近現代の科学・技術の進歩は、地球人口の増加と生活水準の向上を加速してきた。人口増加・繁栄促進に気候変動が重なって、エネルギー・水・食料・資源不足打開のイノベーションに期待がかかる。基礎情報を人が消化して技術や知識を生む。それらを個人や集団の生き方にどう反映させうるのか。増加・促進なき豊かさとは何か。民主的・自由経済世界に新たな「知恵」が問われている。二つの日独会議での所感である。

(小平)

ほんぽん時計第27号
日本学術振興会ボン研究連絡センター

JSPS Bonn Office

Ahrstrasse 58, D-53175 Bonn (事務所住所)

Postfach 20 14 48, D-53144 Bonn (郵便物用)

Phone +49 (0) 228-375050 Fax +49 (0) 228-957777

www.jsps-bonn.de